

建築・デザイン系企画Ⅰ

特別講演：『北海道の住まいの変遷 — 過去から未来へ — 』

■日時：2010年9月30日（木） 14:00～15:50

■会場：北海道職業能力開発大学校 N101・102教室

講師 小林 孝二 Koji Kobayashi 北海道開拓記念館 学芸部長 博士（工学）

◎経歴

1952年 北海道小樽市生まれ

1976年 北海道工業大学建築工学科卒業

1977年～1980年 北海道建築設計監理(株)

1980年～北海道開拓記念館 学芸員

現在 北海道開拓記念館 学芸部長

公職 小樽市の歴史と自然を生かしたまちづくり景観審議会委員

江別市文化財審議会委員 ほか

著書 アイヌの建築文化再考 — 近世絵画と発掘跡からみたチセの原像 — ほか

■主旨 北海道の住まいの変遷 — 過去から未来へ —

北海道の住まいの特徴の一つは、近世以前から道南地方の一部に定着していた建築文化を含めて、本州以南からもたらされた建築文化による影響が大きかった点である。

薄い板壁や土塗り壁、紙障子や板戸の開口部などに代表される、いわゆる伝統的な日本の建築文化は、東北・北陸地方を中心とする降雪地帯において、積雪に対処するノウハウは蓄積していたものの、北海道の冬季、特に内陸部における厳しい寒冷な気象条件には対応できないものであった。

特に、近代以降、開拓が内陸部へと進展する中で、移住者が郷里から持ち込んだ建築様式には、基本的に入植地の気候風土条件に適合しないものが多かった。

北海道における住宅改良、居住条件改善の歩みは、このような防寒性を欠いた「欠陥住宅」と向き合うことから始まったといえる。

一方で、広大な土地（東北6県よりも広い）に散在する集落、地域により大きく異なる気象風土条件や産業基盤と経済力などから、居住者が住まいに求めた条件も一様ではなかった。

多様な条件の下で、結果的に大きな役割を果たしたのが、開拓使による洋風建築技術の導入と行政による普及指導であった。洋風デザイン・技術の普遍的な広がりには、漁村のニシン番屋における上げ下げ窓や洋風デザインの採用（旧花田家・小平町、旧田中家・小樽市など）、農村の茅葺農家における上げ下げ窓の採用（旧泉家・栗山町）などに今日も見ることが出来る。

戦後の住宅改良もまた官主導の形で展開する。戦後の住宅政策の目的の一つは戦災者受け入れてあり新たな開拓移民対策でもあった。このような背景の中で、先に述べた明治期以来の洋風建築技術の定着過程をたどるように、寒地向の防寒住宅が研究され一般に普及する。

近年建築される住宅は厳冬期でも薄着で過ごすことが出来る程になり、冬季における室温は本州以南の住まいに比べてはるかに高いのではないかとみられる。北海道における住宅改良の歴史は、防寒性能の向上という室内環境改善の点では一定の水準に到達したと良いのかも知れない。

一方、住文化の面では、ストーブを囲んだ団らんの場の喪失、寒さを利用した貯蔵場所の消失。屋外環境では、北海道における住宅地の特徴といわれてきた比較的ゆとりのある敷地と塀や門構えを飾らない開放的な配置などが、宅地開発の進展の中で失われつつあり、夏場の景観では北海道外と見分けのつかない住宅団地も多くなってきている。これは昭和初期に見られた住まいの間取り・デザインの中央指向と類似する現象といえるのかも知れない。

北海道の住まいは100年あまりの短期間に劇的な変化を遂げたが、その過程で失ってきたものもまた多かったのではないかと考えている。

■司会：北海道職業能力開発大学校・建築科 田畑 雅幸氏

■企画：(社)実践教育訓練研究協会／建築・デザイン系専門部会